

焼け跡の本

私が最初に手にした漱石の作品は「満韓ところどころ」であった。漱石の小品の中でもとりわけ目立たない、今では殆ど誰も問題にしないこの未完の紀行が私の漱石初体験になったのは幸運な偶然からである。

太平洋戦争の敗北から二年しか経っていない昭和二十二年、私は小学校五年生だった。その頃は戦後の混乱期で都市では餓死者が出るというほど衣食住の総てが乏しかった頃だけれど、占領軍批判は御法度であったにしても一応言論の自由が与えられ、どこか上のほうから降って来たものであっても民主主義はとてもなく新鮮で、重苦しい天皇制軍国主義から解放された大人たちには、天窓は開かれて時代の雰囲気は明るいと感じられたのではないだろうか。幸いにして八紘一宇の暗い時代を活字でしか知らず、反面新生日本の解放感も実感してない私にも、昭和二十年代前半は風は猛烈冷たいがカラッと晴れあがった冬の日々だったという印象がある。

ポツダム宣言受諾の僅か数週間前の岡山空襲で、内山下相生町の家を焼け出された私達一家は戦争が終わっても遂にもと住んでいた町に帰ることが出来ず、市の北郊の母の知人を頼つての間借り暮らしを続けていた。学区が変わって内山下小学校は遠くなったが転校することなど本人の私は勿論、両親も考えもしなかったようである。疎開先から元の小学校に帰るには本人だけでも学区内に住んでいる必要があるし、でなければ「キリユ」という手続きが必要だと聞きかじっていて、その妙な言葉にちょっと記憶があるけれど、「寄留」はしてない。四年から卒業まで担任だったサナダ先生は一度だけだが四十分も歩いて家庭訪問に来てくれた。先生も迷惑だったろうが、私も貧しく汚い六畳一間の借家ならぬ借間を先生に見られるのが恥ずかしくて家庭訪問は厭だった。

その頃、学校行事で学区の町内を巡る廃品回収をやらされたことがある。発足したばかりのPTAの費用捻出のための行事だったのかもしれない。一望の焼け野原にぼつぼつバラックが建てられ、ようやく映画のセットのように安っぽいや家並みが回復しかかった街に、金になる廃品はそれほど潤沢には無かった筈で、この行事には一回だけしか参加した記憶がない。学区外から通学する「もぐり」であった私は、町内会別に分かれた群れのどこからも相手にされず、仕方なくもと住んでいた相生町北を廻る班に紛れ込み、リヤカーの後に就いて秋の陽を浴びて歩いた。

両側の焼け跡から赤茶けた瓦礫や土が崩れ落ちてきて道幅は半分ほどになってはいるが、通りの曲り方、交差の具合は罹災する前の懐かしい街並みの区画を留めている。勢いよく

雑草の伸びた焼け跡はぼんやり見ればどこも同じに見えるが、見覚えのある敷石とか防火水槽の名残りを発見すると、そこに建ち並んでいた家の光景や住んでいた人の振る舞い、子どもたちが挙げていた声までも思い出す。総てのものが記憶より小さく、狭く、短い。が、焼亡した城下町での静穏な暮らしがつい昨日のこのようである。

校庭に戻って荷を整理しているとき、散乱した廃品の中に煉瓦色の薄い文庫本があるのが目に留まった。食料は勿論のこと紙も活字も貴重だった時代である。文庫とはいえ本の形をしたものが捨てられているのは珍しい。拾いあげてみると表紙には右から左に「満韓」ところどころ 夏目漱石著」とある。誰かにとがめられそうな気がして急いでシャツの下にその薄っぺらな文庫本を押し込んだ。が、夏目漱石が何者であるかを識ったことではない。廃品の中に再び投げ込む気になれなかったのはそれが漱石の著作だったからではなくて、如何に薄っぺらであっても一冊の書物であったからである。これが私の漱石との遭遇であった。

当時は紙も払底していて新聞がタブロイド判一枚からやつと本来の大きさを表裏二頁に戻ったのがその頃のこと、私は活字大好きの子どもであつたけれど他に適当な児童読み物などあるわけはなく、戦前の婦人雑誌の付録とか古ぼけた講談本など、身边にある雑多な活字を手当たり次第に読むしかなかった。昭和の初め円本ブームの頃よほど良く売れたらしく改造社の日本文学全集の古本はあちこちで見かけたが、その端本で永井荷風や正宗白鳥を読んでとても退屈した記憶もある。ルビのお蔭で小学生にも読めはしたけれど、流石に内容には歯が立たなかつたと見える。了解困難なアダルトたちの心境吐露に大いに退屈しながら、そこいらにある古本をやたらと読んだのは、他にすることが無かつたのではなくて、口幅つたいことを言えばやっぱり読書の楽しみを知った、つまり活字をたどればそれだけで脳裏に未知の世界が立ち上がって来ることをいつの間にか覚えたからに相違ない。

小学生が佐藤春夫の「田園の憂鬱」を読んで、働いて何かを生産しているとも思えない無為な暮らしの描写に名状し難い倦怠感を感じ取って、そんな生活に反発しながらもそれに背を向けて逃げ出せない魅力も感じているなどというのは、あまり褒められることではないだろうが、本人の気分は既に大人になってこの作品の中に入り込み、ここで人生の陥穽のひとつを発見していたのだと思う。私が早熟であつたというよりも、旺盛な好奇心を充たしてくれる子ども向きの印刷物など身边にはまるで無い環境だったということである。

こつそり持ち帰った「満韓とところどころ」を私は一息に読んだ。

後年、巻を描く能わずという表現を識つた時、徳富蘆花の「思い出の記」、鷗外訳「即興詩人」、それと高校入学直後に図書室で読んだ「チボー家の人々」などの懐かしい私のいっき読み 本のあるこれと共に「満韓」着服の一件を思い出した。それぐらい面白かつたのである。小宮豊隆氏の解説によれば「満韓」で私の発見した漱石は「それから」を書いた直後で、後年修善寺の大患を経て『則天去私』の境地に達する以前の『相当凝つた文章

を書き、できるだけ斬新な印象を人に与へようという傾向のまだ強い頃であった（新書版『漱石全集第十六巻解説』らしい。私も初めて接する漱石独特の『警拔な』表現、短い言葉での確に情景を描いて見せる骨格の太い文章に、小学生なりに強い印象を受けたのは確かで、十年後、昭和三十一年に出た新書版の全集で「満韓」を再読した時、さながら前日読んだばかりのように表現、情景を記憶していたのに自分自身で驚いたものである。

二十歳になった私が良く覚えていたのは漱石の描写した新植民地の大連、旅順の光景ばかりでなく、それよりもむしろ漱石の大学予備門時代の旧友で、今回の満州朝鮮旅行に招いてくれた満鉄総裁中村是公その他の学友たちと過ごした明治二十年前後の漱石青春時代の思い出の方である。問題の解けない生徒は黒板の前で立ち往生したと見えて、数学の嫌いな漱石たちは「今日も脚気になるか」といいつつ教場に出たものだとある。

還暦を迎えたいま、私の漱石」を振り返ってみるとじわりと胸が熱くなるほど懐かしい。多くの人々にとってそうであるように私にとっても「漱石」は青春の書である。「私の漱石」の中核になっている「こころ」にしても、あるいは「猫」も「三四郎」も「門」もそれらを初めて読み、あるいは二度三度と読み返した年代のそれぞれ、時々で面白さが異なるけれど感興のピークはやはり若い頃にあつて、青春のもるもるの実体験の苦い追憶がそれに絡まる。しかし漱石初体験であつた「満韓」の懐かしさはそれとちよつと違っている。

小学生の私に「満韓」が面白くて堪らなかつたのは、それがまだ現れて来ていない生涯の友への期待と、いずれ彼らと共有する筈の学生生活への憧れを呼び醒ましてくれた最初の本であるからではなかつただろうか。つまり、私はこの拾つた文庫本でまだ来ていない自分の青春を予感したような気がする。